

一第94編一 祖父の残した異界

母方の祖父小川安一郎^{*1}は佐賀出身で大阪、神戸に多くの作品を残した建築家であった。私に面識はないが、祖母や母から多くを伝えられた。そして何よりも、子供の頃夏休みを過ごした豊中の

家での体験を忘れることはできない。



写真94-1 豊中長山荘



写真94-2 祖父小川安一郎

1933年、祖父は50歳にして豊中市上野に土地を手に入れ、溜め池や雑木林に囲まれた丘の上に自邸を建てた。「長山居」と命名した木造の2階屋である。阪神淡路大震災で被災したものの、80年後の今も現存し従兄弟家族が住んでいる。当時の私は子供心にこの大きな家に泊まりに行くことが何よりも楽しみであった。特に和洋折衷の極のような、夥しい骨董で溢れる洋間に夜一人でいる時間が格別であった。そこにいと、祖父が設計直前に訪れた欧州の空間と香りに包まれ、小さな島国から飛翔でき

*1
小川安一郎
(1882~1946)

るような錯覚に陥った。その幸せな瞬間を味わいながら、建築の持つ不思議な力に魅せられた。

47歳の時、祖父は初めて洋行し、8ヶ月をかけシベリア鉄道でモスクワを起点に各地を転々とした。最後はナポリから船で帰国の途に着くのだが、当時の建築、設備、家具、装飾の一切を見聞し、その多くを日本に持ち帰った。特にスパニッシュに関する関心は大き

かったようである。現地から買い求めて送った家具は今も洋間に置かれていたが、囲炉裏風の炉、石積み暖炉、等々折衷の極地のよ

うなインテリアは民家風の野趣に富み、他のどこにも存在しない祖父の美意識や建築感が思う存分発揮されていた。装飾意匠にも長けていたその手の跡も至る所に見ることができ

る。数寄屋の和室もすばらしかったが、当時の私にそれを理解できる素養がまだなかった。ところで、祖父の長男小川正^{*2}は建築家を継いだ

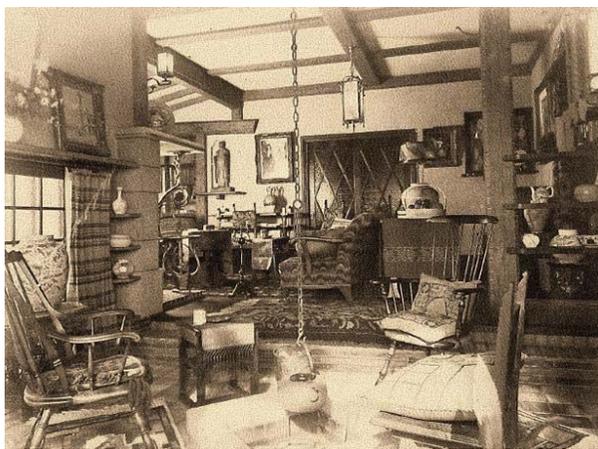


写真94-3 折衷様式の客間

*2
小川正
(1912~2000)